造形的な資質・能力を育む造形遊びの授業

～第２学年図画工作科「はって　かさねて」の実践～

山口大学教育学部附属山口小学校　岡﨑　典子

１　はじめに

造形遊びは、材料を基に表したいことを見付け、仲間と関わりながらつくる、主体的・創造的な学習活動です。ねらいを明確にすることにより、子どもの様々な資質・能力が育まれていきます。本稿で紹介する題材では、以下のように、育成されるであろう資質・能力を具体的な子どもの姿で設定した上で実践を行いました。

- ○　形や色の変化に気付いている
- ○　貼り重ね方を色々に試し、自分なりに工夫している
- ○　思い付いたことを表したり、自分のイメージを伝えたりしている
- ○　仲間の表し方の面白さを感じ、取り入れようとしている

２　授業の実際

題材名「はって　かさねて」第２学年　　※波線は上記の資質・能力が表れている姿

（１）導入での材料の提示の工夫

透明な折り紙を窓に貼り重ねる演示を動画に撮っておき、子どもたちに見せました。すると、「あ、色が変わった」「ちょうちょみたいな形」というつぶやきが聞こえました。それを、ホワイトボード上で子どもたちと再現して確認をしました。そうすることで、形や色の変化に焦点化することができ、「貼って重ねて生まれる形や色を見つける」というめあてをもつことができました。材料については、透明な折り紙の形を「まる」「さんかく」「しかく」、色を赤、青、黄に限定しました。すると、「□を◇にして３枚重ねると扇子になったよ」、「青と黄を重ねると緑になる」などという気付きを、仲間と共有することができたように思います。

（２）イメージと造形的な特徴とを関連付けて思考する場の設定

透明な折り紙の貼り重ね方について、全体で交流する際、形や色などとイメージとをつないで、子どもの発言を板書しました。すると、「○だけ重

イメージと形や色などを関連付けた板書

ねていくとお花のようになった」という仲間の考えを知った子どもは、「△や□でもできそう」と自分なりに発想を広げていきました。

重なった形や色を見合う子ども

全体の場での交流では、「貼り重ね方」について問いましたが、表したいことについても、子どもたちが全体の場で伝え合えるとよかったように思いました。子どもは活動の中で、自分のイメージについて、隣にいる仲間に自然とつぶやいていたからです。

また、以下のように、活動途中に窓の外側から見て、見え方の違いに気が付いている子どもがいました。

見え方の違いを共有

Ｋ：「後ろから見てみようっと。」
Ｓ：「あ、確かにね。」
（Ｋ、Ｓ、Ｈの３人で窓の外に出る）
Ｈ：「すごい。後ろから見ると、色が違う。」
Ｋ：「すごい！でも、やっぱ、輝かないや。」

そこで、外側からの見え方を皆で共有し、光の当たり具合による色の違いや、貼り重ねる順番による見え方の違いに気が付いていることを全体の場で価値付けました。

（３）活動の過程の振り返り

授業の終末、「いいな」と思った自分と仲間の形や色を「いいなカード」に記録するよう促しました。すると、組み合わせた形の面白さをあらためて感じていたり、「□だけたくさん重ねて貼ってあるけど、お城みたいに豪華に見える」と、仲間のイメージを自分なりの見方で捉えていたりする姿が見られました。中には、いくつもの偶然が重なって生まれた形や色の美しさを感じている子どももいます。そのような即興性のある表現や具象物にはならないイメージも認めるようにしたいと思いました。

３　実践を振り返って

このように、子どもたちは、造形遊びの中で、様々な資質・能力を発揮している姿が見られました。そのような子どもたちの活動途中の姿を見取り、価値付けることが必要です。今後も、造形遊びのもつ教育的意義について明らかにしながら、実践を積んでいきたいです。